書けない探偵小説

夢野久作

青空文庫

素晴らしい探偵小説が書きたい。

ピカピカ光る太陽の下を傲華な流線スターがスウーと横切る。その中に色眼鏡をかけて済まし返っているスゴイような丸髷美人の横顔が、ハッキリと網膜に焼付いたまま遠ざかる。アトからガソリンの臭いと、たまらない屍臭とがゴッチャになってムウとするほど鼻を撲つ。

……ハテナ……今のは、お化粧をした死骸じゃなかったか知らん……。

と思うトタンに胸がドキンドキンとする。背中一面にゾーッと冷たくなる。ソンナ探偵小説が書きたい。

美人を絞殺して空屋の天井に吊しておく。

その空屋の借手がないために、屍体がいつまでもいつまでも発見されないでいる。

タマラなくなった犯人が、素人探偵を装って屍体を発見する。警察に報告して、驚くべき明察を以て自分の犯行の経路を発く。結局、何月何日の何時何分頃、何ホテルの第何号室に投宿する何某という男が真犯人だと警官に予告し、自分自身がその名前で、その時刻に、その室に泊る。その一室で警官に猛烈な抵抗を試みた揚句、致命傷を受けて倒れる。万歳を三唱して死ぬ。ソンナ探偵小説が書きたい。

或る殺人狂の極悪犯人が、或る名探偵の存在を恐れて是非とも殺して終おうとする。

そうすると不思議にも、今まで恐怖という事を知らなかった名探偵が、極度にその極悪犯人を恐れるらしく、秘術を尽して逃げ惑うのを、犯人が又、それ以上の秘術を尽して逐いまわる。とうとう大きな客船の上で、犯人が探偵を押え付けて、相抱いて海に投ずる。

二人の屍体を引上げて、色々と調べてみると、犯人は探偵の昔の恋人であった美人が、変装したものであった。……といったような筋はどうであろうか。

トロツキーが巴里郊外の或る小さな池の縁で釣糸を垂れていた。嘗て親友のレニンが、その池に投込んだというロマノフ家の王冠を探るためであった。

トロツキーは成功した。やがて池の底から金玉燦然たる王冠を釣上げてニコニコしていると、その背後の夕暗にノッソリと立寄った者が在る。

「どうだい。釣れたかね」

トロツキーがビックリして振返ってみると、それはレニンであった。莫斯科の十字路で硝子箱入の屍蝋と化している筈の親友であった。

トロツキーは今些しで気絶するところであった。王冠と、釣竿と、帽子と、木靴を残して一目散に逃失せてしまった。

「ウワア――ッ。幽霊だア――ッ」

レニンはニヤリと笑ってアトを見送った。草の中から王冠を拾い上げて撫でまわした。

「アハハハハハ俺が死んだ事を世界中に確認させるトリックには随分苦心したものだ。しかしあのトロツキーまでが俺の死を信じていようとは思わなかった。

トロツキーは俺の筋書通りに動いてくれた。彼奴にだけこの王冠の事を話しておいたのだからな。……俺がアレだけの大革命を企てたのも、結局、この王冠一つが慾しかったからだとは誰も知るまい。況んや俺が革命前から、この巴里で老舗の質屋をやっている、妾を三人も置いている事なぞ誰が知っていよう。アッハッハッハッ。馬鹿な人類ども……」

といったような探偵小説が、日本では書けないだろうか。

或る海岸の崖の上の別荘に百万長者の未亡人と、その娘が住んでいた。二人ともなかなかの美人であったが、娘の方がイツモ何者かに生命を狙われて殺されそうになるのを、そのたんびに或る青年名探偵が現われて救い救いしてくれた。

未亡人と娘は名探偵に満腔の感謝を捧げた。娘と名探偵とはとうとう恋仲にまでなったが、しかし、それでも娘の生命を狙っている悪人の正体ばかりは、どうしても掴めなかった。流石の青年名探偵が、いつも危機一髪で喰い止めるほどの神変とも、不可思議とも説明の出来ない怪手腕を以て、根気強く娘の生命を脅やかし続けるのであった。

ところがその娘が或る日、崖の縁端を散歩しているうちに突然に強い力で突落された。落ち

る途中で一回転した拍子に、崖の上から並んで覗いている青年探偵と母親の、揃いも揃った冷酷なニコニコ顔が見えた。

それからその娘の頭が、崖の下の岩角に触れる迄の何秒かの間に、今までの一切の不可思議がグングン氷解して行った。その何秒かの間の彼女の回想の高速フィルムの全回転が、そっくりそのまま驚愕と、恐怖に満ち満ちた長篇小説として書けないものであろうか。

偃僂（せむし）の隠亡（おんぼう）が居る。

人跡稀な山奥の火葬場で人を焼く序（ついで）に、棺桶を発（ひら）いて目ぼしいものを奪い取る。中には棺の中で蘇生している人間も居るが、そんな人間は介抱して正気付かせて、生前の秘密をスッカリ喋舌（しゃべ）らせてから又撲殺して焼いてしまう。そうしてその死人の遺族を脅迫して金を奪い取り、巨万の富を重ねる。

そのうちに美しい令嬢の失恋自殺屍体が生き返っているのを発見して自分の妻にしてしまう。隠亡をやめて遠国に住んで、美しい妻と共に一生を楽しく暮す。

その思い出話といったようなものが、一千一夜式に書けないものだろうか……。

何かと書いて来るうちに、お約束の六枚になった。ところで読返してみると、これが即ち探偵小説と申上げ得るものはタダの一つもない。みんな大人のお伽話（とぎばなし）みたいな心理描写ばっか

りである。
……ハテナ……。
俺は一体、何を書きたがっているのだろう。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集11」ちくま文庫、筑摩書房
　　1992（平成4）年12月3日第1刷発行
入力：柴田卓治
校正：渥美浩子
2001年6月6日公開
2006年2月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書けない探偵小説

夢野久作

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/